


せんわ
高校生と創る演劇



2022
11/5(土)6(日)

報告書

おじいちゃんから
聞いた
話なんですけど、



SEN WO KAKU
2022

自分で『せんをかく』インタビュー

Q1 着想はどこから得たのですか？

豊橋をリサーチさせてもらったときに「三川宿」「駅前ホテル群」「海岸に流れ着くヤシの実」などから、「時的に滞在する場所」や「流れ着く場所」というイメージをまですました。「おいしいばかりの神様も流れ着きますし、「鬼祭」の赤鬼もどこからかやってきて、こらしめられて逃げていく。ではそこで生活する人々は、どんな目線で「時的に滞在し、また出ていくものたち」を見ているんだろう。そんなことをまずは考えました。私や演出チームも「時的に滞在するもの」なので、今回の作品がどんな風にみられるか、というメタ的な要素もそこにはあります。

それから、豊橋カレラうどんを食べた時に「ごはんとかカレーうどんの間にとろろで仕切っているのが妙にグツと来て、根拠はないけど豊橋っぽい、と思ったんですね。そこに、牛川の渡ししのイメージが重なって、せんをかく、という言葉につながっていききました。線って、仕切ることも出来るし、つながりこともできる。同じ輪の中に入って「緒だね」ってなんかウソっぽいじゃないですか。仕切りもあるけどつながれる、というのが線のいいところだなと思っています。

Q2 執筆する際に
気をつけたことはありますか？

いかに「遊び道具」として脚本を現場に渡せるか、ということが一番考えました。ひとつひとつの要素はあまり抽象的にならないようにしながら、積み木のように好きに組んで遊べるような脚本を目指したつもりです。あとは、演出家と「口伝え」のイメージを共有していたので、会話のほとんどが「人から聞いた話を話す」状態になるようにチャレンジしました。

様々な事情で出演できなくなることも考慮して、登場人物を出演者の数より少なくしました。また、カットやシーンの入れ替えがしやすいように、章立ての構成にしました。このあたりのアイデアは、リサーチしながら演出チームと話すことで生まれたものです。

書き始めた当初は、渡し守の話ではじまり渡し守の話で終わるつまり構造としては古典的な「行って帰る物語」を思い描いていたのですが、最後の朝と夜の境を決める場面を書いたときに、もうこれ以上は書かなくていいなと思ったことを覚えています。観客は、渡し守の渡した先であの物語を見たのかもしれないし、船から下りることなくずっと渡し守の話を聞いていただけなのかもしれない。この辺はゆだねようと思いました。登場人物の一人称がすべて「わたし」なのも実はこだわって

未来の劇場へ



演出 川口智子

明確な配役のなさ、自作の人形と人間とを行き来しながらの物語り、伴奏なし11人で歌う道中歌、デコトラに模してつくった劇場内野外劇場、グラグラの棒をつかった向に安定しない影絵劇、八百長を隠さないトントン相撲、巨人による山への植樹、お米（のふり）をしたプラスチックの粒（のアクロバット……）ひとつひとつには元ネタが存在するいわばパロディなのだけれど、パロディというのは喜びとか救済への想いとか、人間の感情と共にあるものです。

豊橋に伝わるお話の中でやっぱり一番好きなのが、いだらばうちのお尻の跡の話で、どうしてもこの話を始めた人は人を喜ばせようと物語り始めたのではないか、この話を聞いた人の日常の風景を少しおかしくしたのではないかという気がして、語り始めること、語り継ぐことの遊びを描きたいと思ううちに、「せんをかく」はシアターのパロディのつまったおもちゃ箱のようになっていて、いくつものシアターの形式を遊びながら何かを語り出そうとしていた。

簡単なルールだけを共有して、遊びの中で語る、その生々しさを私は「道中劇」と名付けた。いろいろな道中。誰かの語りと次の語りの間の言葉。道中、ここまで来てどこかへと向かう。私の道中、流れてきてしばらくくいつく、ヤシの実の道中、変えないことを守ろうとする。鎖国。の道中、開かれた国からはじまる。彼女たちの道中。東海道。道中日記を読めば、そこには起こった出来事が描かれているけれども、ただ「歩を進めるそ



Tomoco Kawaguchi

の「二歩」の道中は残されていない。道中は残せない。道中はいまいで形のないもの。点と点と残された足跡とは違う。だから、演劇では道中を描くことができる。描く必要がある。いだらばうちのお尻の跡を語り継ぐ、その語り継ぎの道中を生で描く、喜びとともに、人間の感情とともに。そして変化する。やがて消える。

舞台上のひとつひとつの言葉が、ひとりひとりがその道中を歩むとすれば、「せんをかく」という劇場はいつか誰の道中を描くか。6週間のお稽古の時間、お客さんを迎えての上演の時間、過ぎてしまえば消えてなくなる道中を誰とともに歩むか。これは上演への演出プラン。子ども、女性、貧困者、社会のやり方に参加していないと矯正されるもの、人間であれと人間を剥奪されるもの。国が開かれ外交のために連れ出された。彼女たち。名前も年齢も残らなかつた彼女たち。出国のために石炭室に入れられて命を奪われ恥の数となって記された彼女たち。からゆきさん。

語り継ぎを描くとすれば、語り継ぎのダークサイドを同時に描かなければならない。彼女たちの道中にはあまりにも知られていないし、仮に知られば好奇の目にさらされることと隣り合わせになる。語り継がれず、体と感情が剥がされた彼女たちの存在を、語ることができないということをまず受け入れなければ、そのために劇場がある。これは稽古場への演出プラン。

SEN WOKAKU



11人が出演するとわかって書き下ろした新作なのに、4つの役柄しか登場させていない田坂さんからの嬉しいボール。そもそも明確なキャストイングをするつもりは当初よりなく、長いモノローグ（演説）を複数人が覚えていたり、場面によってはすべての台詞を全員が覚えていて、上演によって演じる人が変わったり、即興で台詞を分担したりしながら物語をつないでいった。



脚本 田坂哲郎



Tetsuro Tasaka

います。と、この辺の話はすればするほどダサイ気もするんですが、二千文字書いてくれつつはこういう話も書けてことだと思ってるんで書きまじりましたがだんだん恥ずかしくなってきました。

Q3 実際に公演を
見ていかがでしたか？

ちゃんと遊び道具になって安心しました。こういう、市民と創る系の作品を観に行ったときに感じる、物語に奉仕させられている出演者のやるせなさが嫌だなーと思っていたので、そういうのが一切なくて、脚本の良しあしを飛び越えたところに演劇があつて、参加させてもらえてよかったなと思いました。これはほんとに演出チームとスタッフ及び出演者がすごいので、私は乗っかってもらったという感じです。

事前のリサーチなどを通して、演出家とイメージを共有する時間をしっかり取らせてもらえたので、ただ脚本を書いて渡すだけではない共同作業が出来たように感じています。

Q4 公演が終わって
思うことはありますか？

なんでこの事業が福岡市にないんだっていう……。



描くことが難しくなる。2つのどちらのパーティーにも入らず自分で考え始めようとする人が出て来る。実際に「家」と「木」をつくりながら、「地球」をデザインしながら、自分の体をその場に存在させながら話し始める、劇場の時間だった。現実のパロディは現実よりもずっと時間をかけて感情があることを理解しようとしていた。ゼロではないから難しい。すでにあるものを変化させたりデザインし直したりすることでは追いつけないような感覚。だからこそ、私たちは劇場でその難しさを語り始める。遊びながら、おかしみを込めながら。未来の劇場にどうパトンを渡せるか。それが、今、語り継ぎを担っている私たちの役割なのだと思ふ。



11人が出演するとわかって書き下ろした新作なのに、

4つの役柄しか登場させていない田坂さんからの嬉しいボール。

そもそも明確なキャストイングをするつもりは当初よりなく、

長いモノローグ（演説）を複数人が覚えていたり、

場面によってはすべての台詞を全員が覚えていて、上演によって

演じる人が変わったり、

即興で台詞を分担したりしながら物語をつないでいった。

振り返ると、ずいぶん大変なことをしていた。



古賀彰吾



Shogo Koga

◆過程で考えたこと

なぜ演劇をやるのか、何に魅力を感じていたのかを自らに問っていた。それは、演出チーム全体の裏テーマだった気がする。演劇が「出会う場所」であったり、「ドラマを通して考える場」であったり、複合的なものであるというのは当然のことだが、その場に面白いことが起こるように考え、仕向け、共謀する場であるこの現場では感じていた。そして、それには主体性がなければならず、演出の指示に従っているだけでは徐々に魅力が色褪せてしまう。高校生達は悩みながらもそれぞれの楽しみを見出していったように思う。

◆結果を見て考えたこと

作品の手触りが不思議だった。高校生たちはある種、物語を放り出していった。それは役者として全く正しい態度だった。脚本そのものが特殊で二つの

物語として未完だから分かったように演技をすることは許されず、また観客に委ねるというある種の甘えも通用せず、演出が暫定的な答えと未開な部分とを負って作品としたからだと思う。

◆公演が終わって思うこと

演劇は遊びの要素を含む。模擬の遊びである演劇に、演出家はその日その日の稽古がどうなるのか読めないように運の要素をうまく取り入れた。なりよりも稽古場の生命感を優先する。少なくとも稽古期間中に高校生は毎日楽しんでいたのではないかと思うし、その躍動した状態は本番にも表れていた。まずはそこから演劇を伝えられたことは実りあることだったと思う。

清々しい風の通る場所を目指して



浜野まどか



Madoka Hamano

「風の通り抜ける稽古場を作りたい。」高校生と創る演劇の稽古開始前に、演出チームで話していたことでした。稽古場という、密室空間で起きたことが様々な問題になっている。なぜ、演劇は密室で作られるのか？もつと稽古場に色々な視点が入るにはどうしたら良いのだろうか？そして、誰もが声を上げられる環境はどうすれば実現できるのだろうか？

創作過程で感じたことは、「対話」の重要性でした。けれど、現在の国際社会や国内の政治、SNSを見ていても「対話」がうまく機能しているとは思えません。私自身も対話することが得意ではないし、放り出したくなる場面もあります。時間も体力も必要で、時に傷ついたりすることもあるからです。

それでも、人と人との「対話」を諦めずに続けていくこと。「一人」が自立し、個々が連携していくことで、今、目の前で起きていることを、人ごとにせずに関わっていくことが出来るのだと思います。机で考えるのではなく、五感を使い手足を使って考えること。そうやって、外の世界と繋がることで異なる視点や価値観を尊重し、人を大切にすることが出来る。これは、高校生の皆さんの穏やかな関係性と、演出・制作チームの緩やかな関係性を見ていて教えてもらったことです。そして、これらが「風の通り抜ける稽古場」を実現する道なのだ、感じました。高校生の皆さんも私たちもこれから様々な稽古場や仕事場で、今回の経験を活かしていくことが高校生と創る演劇「せんをかく」の成果だと思っています。

せんをかく

SE N WO K A K U

高校生と創る演劇

出演者紹介

質問：「今は亡き人に会えるとしたら、誰に会ってどんな話をしたい？」



中野有莉

Yuri Nakano

【ステイプ・ジエプス(1955-2011)】

「人の生きる意味」とか「人生とは何か」を話したい。どうしたら、人生の目的をもって生きていけるのか。今、短期的な目標はあるけれど、例えば世界遺産検定に合格するとかでも、合格したらそれで終わりっていうか。人生を通してやりたいようなこととかを見つけない。アメリカのカフェとかで会いたいかな。



片山史博

Fumihito Katayama

【フレディ・マキネリー(1946-1991)】

彼のパフォーマンスに対する想いとか情熱っていうのを聞きたい。異れ多くも横でヘアースでも弾きながら、弾くのは「Killer Queen」か「Another One Bites the Dust」。あまよくは歌ってられるかも！カリスマ性、一匹狼みたいなところがあって、どこか孤獨な、そういうところが好きです。



今村絆那

Hanna Imamura

【太宰治(1909-1948)】

芥川賞をとれなくてスタボロ口になった太宰さんに、その時売れた本を見ながらラブレターというファンレターを送りたい。それから太宰さんに会って、口説かれない。死んだ後にも会えるなら、太宰さんが送った恋文が死後に全部はれるのどう思うの？っていうのも聞いてみたい。



若林梨奈

Rina Wakabayashi

【小学校3年の時に二輪車を習っていたおじいちゃん先生(2015没)】

そこまで仲良かったわけじゃないけど、その人が教えてくれたから、亡くなつて二輪車はやめちゃった。自転車にぶつかって死んじゃったってなんとも聞いたけど、本当にそうだったのかいまだに気になってるから聞いてみたい。



荻原花音

Hanon Ogiwara

【ジャンス・ダルク(1412-1431)】

神の声を聞いて、「フランスを救いなさい」しか言わなかったけど、絶対他のことを聞いてははずだから、何聞いたのかなくて。捕まったところに面会に行つて、手紙を持って行って、それに書いてもらう。私はジャンス・ダルクのお家を見に行つて、その状況をお伝えしてあげる。



伴美月

Mitsuki Ban

【清少納言(966頃-1025頃)】

「枕草子」の美しいものとか嫌だと思つたものを言葉で聞きたい。私の身近な嬉しいこととか嫌だと思つたことを清少納言に共有して、お褒めの言葉、講評をもらいたい。話すならフランスのこと、今、楽しいことは稽古しているとき好きな音楽を聴いているとき美味しいご飯を食べてるとき。



金子あさひ

Asahi Kaneko

【ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)】

ベートーヴェンに会つて最近の曲を聴かせたい。いろんな国の曲とか、CDも聴かせてみたいし、どんな反応するのか。聴こえる時に会うか、骨伝導のイヤフォン持つていくか？最初の曲は、ベートーヴェンの代表曲を聴かせて「これであつてる？」って。最近の曲だったら、まず「紅蓮華」！



山田あおい

Aoi Yamada

【伊能忠敬(1745-1818)】

中学校の先生が伊能忠敬好きで話して、日本地図歩いて作つたつてすこいって。なんで日本地図作るうなんって思つたのか気になる。日々、歩幅が変わらないように気を付けて歩く準備期間とか、気合すこいな。そのまま歩いて日本地図作りたんだ。歩いて世界地図を作つて途中の伊能忠敬に会いたい。



田口勇丸

Yumaru Taguchi

【三浦春馬(1990-2020)】

映画とかドラマとか、三浦さんにも特別興味があつたわけじゃないけど、自殺された話を聞いてめっちゃショックで、数日間、なんだった。それで映画とか見て、すごい輝いてたし、あんなに温和そうな人が苦しんでなんで自殺という選択をしたのかな、いけなかったのか。「仕事楽しいですか？」って聞くのかな。



古田英

Hana Furuta

【明智光秀(1528-1582)】

「本能寺の変」の真相を知りたい。織田信長の首がどこにいったのかとか、明智光秀がどう思つて本能寺の変を起こしたのかとか。忠臣だつた光秀がなんで。事件を起したあとの光秀に会いに行つた。幼少期の記録も全然残つてない人だから、幼少期の話から聞きたいかな。



中尾結菜

Yuina Nakao

【正宗(五郎入道正宗、生没年不詳)】

刀が好きなんですけど、刀の中でも正宗という刀工さんが好きで話ができたい。刀づくり体験とかしてみたいし、作っているところを見て欲しい。美しさもさり、実用性も備わっているのが刀の魅力。キラキラして水面みたいな刃文が好き。極意を聞きたい。

2月17日[火]	募集開始
4月22日[金]	オーディション申込締切 キャスト希望31名、スタッフ希望7名、計38名の応募があった。
5月6日[金]~8日[日]	ワークショップオーディション オーディションは「物語」をテーマにワークショップを行った。 6日・7日は少人数に分かれて口伝のワークを行い、伝えるごとに物語が変容していくことを体験した。一人ずつ好きな物語を発表したあと、全員の話合体させ芝居を作った。8日は全員参加でワークショップを行った。脚本の田坂さんの作った神話の物語を、5つのグループに分かれ発表した。
6月18日[土]~20日[月]	リサーチ 1日目は豊橋民話保存会の小柳津乳さんにご案内いただき、豊橋市内の神話の残る地を回った。その後安久美神戸神明社の平石宮司に「鬼祭」についてお話を伺った。 2日目には東海道五十三次の33番目の宿場町である二川宿本陣資料館で抜け参りについてのリサーチ、豊川を公道として結ぶ牛川の渡りリサーチ。3日目はばったり堂を営む内浦有美さんにお話をうかがった。公演名が「せんをかく」に決定!
8月16日[火]~19日[金]	夏のプレワークショップ 劇場の外へでて町感覚採集へ。それぞれ異なるキーワードが書かれたくじ引きをし、五感をこらして街を歩いた。その後、街で採集した感覚を基にした地図と人形を一人ひとつずつ制作した。 1日目には舞台監督の伊東さんと高校生スタッフを中心に、1日目に作った地図を分解・結合し、大きな一つの立体地図を作り上げた。 完成した立体地図の上で、田坂さんが書いたA4サイズ1ページ分の長文演説のテキストを、キャスト立体地図と人形をつかい上演した。
9月1日[木]	自主稽古開始
15日[木]	スタッフオンライン打ち合わせ
23日[金・祝]	チラシ・ポスター完成
24日[土]	チケット発売開始
9月26日[月]~10月3日[月]	1週目
10月4日[火]~10日[月・祝]	2週目
13日[木]~16日[日]	3週目
18日[火]~23日[日]	4週目
24日[月]~30日[日]	5週目
11月1日[火]~4日[金]	6週目
11月5日[土]	◆13時・入場者87名 / 18時・入場者119名 ◆13時・入場者123名 / 17時・入場者149名 ●総入場者数478名
6日[日]	
2023年 3月7日[火]	本番映像上映会



【稽古】 第1週目

● 9月26日(月) — 10月3日(月)

稽古初日は脚本の田坂さんが来館し、演出チームと高校生で改めて顔合わせ、脚本の読み合わせを行った。「せんをかく」は人形を操る人形劇の要素が大きな特徴。人形の構造を理解するために1週間かけて人形の模写を行った。また、稽古の最後に毎日成果発表をすることが決定。パンブーダンスの魅せ方や構成などを高校生たち自身で考え、話し合いや練習が続いた。10月2日は人形指導の眞野トウウウさんが来館し、人形操作の基本についてのレクチャーを受けた。人形の視線や重心移動について学んだり、自分たちが作り上げた人形の動かし方のコツを教えてもらい、実際に人形を動かしてみた。



9日の午後には、演説の稽古から一つの地域を基にした陣取りゲームを行った。環境問題・空き家問題・移民・住民同士の対立や排除など様々な社会問題をもつめ、考えながら話し合い、意見交換が行われた。高校生スタッフは劇中に使用する小道具の制作がスタート。広報活動の会議も行われ、Instagramでの広報活動を中心に高校生スタッフも広報活動をはじめた。

【稽古】 第4週目

● 10月18日(火) — 10月23日(日)

本番時に使用する人形作りもスタート。高校生スタッフは、舞台上の小道具として登場する蟹や植木の木づくりも本格的に始まり、稽古場の傍らで黙々と作業を続けていた。

【稽古】 第3週目

● 10月13日(木) — 10月16日(月)

本格的に台詞覚えがスタート。「演説」とよばれるA4サイズページほどの長台詞が5つあり、公演ごとにキャストイングを変えるため、高校生たちは台詞覚えが大苦戦。学校によってはテスト週間に入り、稽古場の隅でテスト勉強をしながら稽古に参加した。



【稽古】 第5週目

● 10月24日(月) — 10月30日(日)

24日より、テクニカルスタッフが集まり、会場となるアートスペースの舞台に美術照明・音響の仕込みが行われた。「せんをかく」の衣装合わせが行った。衣装の方向性が決まり、高校生たちも本番に向けて集中力が増えている。



【稽古】 第6週目

● 11月1日(火) — 11月4日(金)

最終週に差し掛かり、演出チームも高校生もさらに集中力が上がってきている。3日の稽古で初めてシーンの通しを行い、作品の全体像がみえるようになった。舞台上では照明や音響の調整も並行して行われた。4日にはゲネプロを実施。本番までに調整する課題を確認した。本番でより遊んで楽しみなながら公演が行えるよう調整が最後まで行われた。



【稽古】 第2週目

● 10月4日(火) — 10月10日(月)

第1週に引き続き、毎日発表することを心掛けたパンブーダンスとシアターゲームを行った。作品を作り上げるために必要な視点や感覚を全員で共有していく。8日・9日には作



3日は眞野さんと演出チームが段ボールで作った巨大なネコの人形をキャスト中心に動かしてみたり、猫に見える動き方、仕草、重心移動を考え、それを大人数で意思疎通を図りながら操作する難しさを痛感した。

【稽古】 第1週目

10月4日(火) — 10月10日(月)

第1週に引き続き、毎日発表することを心掛けたパンブーダンスとシアターゲームを行った。作品を作り上げるために必要な視点や感覚を全員で共有していく。8日・9日には作



おじいちゃんから
聞いた話なんですけど、

せんか
高校生と創る演劇

THEATRE

高校生

スタッフワーク

舞台を創作する上で欠かせない
高校生スタッフ。本作品は
人形劇を組み込んだ公演のため、
スタッフワークは人形作りや
小道具作りが中心となった。
本番では舞台上で舞台美術の操作を
担当したりと大活躍！

小道具作り

小道具の作り方を古賀さんに教わり、
稽古を見学しながら日々小道具作りに専念した。
本作品のアイコンである
蟹や木々はサイズが小さく細かい
作業であったが、
1つずつ丁寧に製作し、
最後にはスピーディに
綺麗な仕上がりで
作れるようになった。



人形作り・修正

等身大から手のひらサイズの
様々な大きさ・形の
人形作りは
本番前日まで行われた。
キャストが操作した人形の
直し作業もスタッフの仕事。
また、人形アドバイザーの
眞野さんによる
ワークショップで
人形の操作を学んだ。

稽古記録

欠席や遅刻・早退したキャスト、
スタッフが稽古に
追いつけるように、
毎日稽古の記録をつけた。
稽古内容、稽古スケジュール、
その日出た大事なワード、
伝達事項が
記録されている。

舞台美術製作

舞台監督の
伊東さん指導のもと、
舞台美術の大きな雲を
製作した。和紙を
カッターでまっすぐ
切断したり、木をのこぎりで
綺麗に切り落とししたり、
基本的な作業でも
知らないことばかり。
みんなで作った美術が舞台上に
仕込まれたときは感無量だった。



SNS (Instagram)

稽古中の写真を撮って、
Instagramに投稿し
広報活動をした。本番が
近くなるとストーリーズで
キャストによる
カウントダウン動画を撮影し、
追い込みをかけた。

ホワイエ装飾

2Fホワイエにて、
作品に纏わる飾りつけをした。
稽古記録の掲示、
フォトスポットの設置や、
小道具の蟹を散りばめて、
来場するお客さんに公演を
より楽しんでもらえるよう
思考を凝らした。



公演当日の仕事

「舞台美術の操作、受付スタッフ」

公演当日は、スタッフも衣裳を着用し、
舞台上で舞台美術の転換や操作を行った。
小屋入りして本番まで1週間という短い時間で
各自動きを覚え、本番に臨んだ。当初は舞台上上がることを
想定していなかったため緊張したが、
小道具を使った演出が
多い本公演で、
責任感を持って
見事役割を果たした。
お客さんを出迎える
受付スタッフも交代で
担当した。



高校生と創る演劇

高校生スタッフ紹介 — 質問：「今は亡き人に会えるとしたら、誰に会ってどんな話をしたい？」



丸地咲実

【フィンセントファン・ゴッホ (1853-1890)】
「自分が生きていた時は売れなかった絵が、死んでからずっと経ってまったく知らない人間どもにチャホヤされるのどうですか？」って。ゴッホは病んで、「いや、いや、いやなんですよね…」って言うかな。



鈴木維英

【ルチアーノ・パヴァロッティ (1935-2007)】
世界三大テノールの1人で「神に祝福された声」と言われていた彼と、その美しい声のことや、サンタルチア、オソレミオなど数々のカンツォーネの世界に人々を引き込むにはどうすればいいか、いろいろ話したい。



大林千紗

【鷺沢順 (1968-2004)】
鷺沢さん自身の学生時代とか、今どんなことを考えているとかパーソナルな部分について質問してみたいです。描いているのは私と年代くらい1、0年代のキラキラしている生活を送っている人の話が多いんですけど、登場人物たちが抱えている心の中の感情は結構泥臭くて、自分のドロドロした部分が少し救われる気がします。



飯領田 楓

【福沢諭吉 (1835-1901)】
「天は人の上に人を造らず」について詳しく知りたい。私的にはふわっとゆるっとしか知らなくて、「みんな平等だよ」って一番身近な。お札にもなっていて、常に「万円欲しいな」という、そういう人だから、身近なのに知らないのは失礼だから知りたいな。イメージは頑なおじいちゃんであまり話してくれないかもだけ。



野本結歌

【三浦春馬 (1990-2020)】
「TWO WEEKS」というドラマで三浦さんがお父さん役で、娘役の子がいて、2人で裏でどんな話をしていたのか、撮影秘話をぜひ聞きたいです。「これも頑張ってください」と伝えます。



坂柳花奈

【卑弥呼 (生年不明-248年頃)】
ずっと部屋に閉じこもって、近くに寄せる男性は弟だけ、亀の甲羅で占いをして国をまとめあげたって意味が分からないし、謎が多すぎ。光を操れたりと不思議な力をもつ人だったんだと思う。卑弥呼に会ったら占いをしてもらいたいです。あんなその男はやめときなさいとかこれ向いてるわよとか教えてほしいです。笑



石渡鈴乃

【岩田聡 (1959-2015)】
任天堂の元社長。話とどうか会って一緒にゲームがしたい。「MOTHER」っていうゲームをしながら制作秘話とか、ちょっとしたことでもいいから聞きたい。



杉浦愛理

【アルフレッド・アドラー (1870-1937)】
心理学者。「嫌われる勇気」を読んでアドラー心理学を知って、自分の人生に自信と勇気を与えてくれた人。自分の悩みをとかん聞いて欲しいし、話し相手になって欲しいし、哲学とか心理学が好きなのでお互いの意見を討論したりとかしたい。「すべて」の悩みは人間関係から」という考え方が本当にしつべし。

高校生キャストスタッフ アンケート

1 5月のオーディションワークショップについて

●私は事前に計画を練って完璧にしてから何かに挑む性格なので、即興や変化を重視した内容に不安や戸惑いが大きかったが、その場でどうにかする、その瞬間を楽しむという考え方がオーディションの段階から芽生え始めたのかなと今振り返って感じる。

●スタッフ希望で応募したため、セリフを発するワークが想像以上に多くて驚いた。全く経験がなかったので、「同じチームの子に迷惑かけちゃったな」「私なんか参加しちゃダメだったかな」と不安な気持ちもいっぱいだったけど、それ以上に「この演出チームと高校生のみんなが創る作品に関わりたい」というワクワクと参加したい気持ちにより一層強まった。

●私が今までやってきた高校演劇と全く違うものを求められていると思った。自分で物語を作る経験はあったけど、グループで一つの物語を作り上げるのは難しい反面、新鮮で楽しかった。オーディションに受からなくても良い経験ができたのでよしーと思った。

2 8月のプレワークショップについて

戸惑いとワクワクの連続だった。様々なワークをしたことで、みんなの魅力を知り刺激を受けた。演出チームとはオーディションのときより深く関わり、ご自身のことや演劇、舞台のことについて少しずつ知っていくことができた。

●オーディションから本番までの期間で、プレワークショップが一番不安を感じた時期だった。4日間なのに1週間くらいやった気分分、心身ともに使い切るようなハードさだった。どう頑張っても他の参加者に追いつけないと思った結果逃げ道ばかり探してしまう自分に劣等感を抱いて嫌気がさしていたところ、智子さんがそれをも肯定



してくれて自然と前向きになれた。
●高校生スタッフもキャストと一緒ワークショップの発表や交流ができて楽しかった。
●街歩きや人形づくり、たくさんの方の文章量のセリフ覚えやダンスなど、毎日何をやるのか全く予想がつかずワークショップに行くのが楽しかった。他の参加者は先輩も多く敬語がタメ口かどうかしよう…と関わり方に苦戦した。

3 9月の自主練習について

●この期間に参加者みんなの距離がグッと縮まった。プラットに行くのが毎日楽しみだった。本番まで和気あいあいとした雰囲気であいられたのは、自主稽古期間があったことが大きいと思う。
●自主稽古というよりみんなで話したり仲を深める時間が長かったけど、あのゆるさでなければおそらく途中で挫折していたと思う。最初は大人がいらない状況が不安だったけど、大人がいらないからこそ緊張がほぐれて参加者と仲が深められたのだと思う。この期間があったおかげで、いつの間にか自分の中で、緊張する場所にならなくなってしまっていたプラットが、楽しい場所、という意識に変わった。

●名前を覚えられて仲良くなる良い機会だった。放課後に集まって何かをすること自体が楽しかった。
●オーディションやワークショップではみ

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	5	6	0	0	0
	スタッフ	4	2	1	1	0
キャスト	長さ・回数	5	4	2	0	0
	スタッフ	2	5	1	0	0
キャスト	内容	4	5	2	0	0
	スタッフ	5	3	0	0	0

など仲間良くなり切れないかなと思ったけど、自主稽古のおかげでみんなとの距離が縮まった。初期に呼び名を決め、その日ごとの参加者数で何ができるのかをみんな

4 稽古について

●最初は不安だったけど、演出チームと距離が近付いたことやセリフ覚えが進んできたことにより徐々に楽しい気持ちがあがった。「何にも属さない誰のものでもない私という人」としてこの企画に取り組みたかったのだが、参加者や演出チームが私のことをまっすぐ見てくれて、稽古をしている間は私が私としていいろんなことに向き合えた期間だった。

●最初は不安だったけど、演出チームと距離が近付いたことやセリフ覚えが進んできたことにより徐々に楽しい気持ちがあがった。「何にも属さない誰のものでもない私という人」としてこの企画に取り組みたかったのだが、参加者や演出チームが私のことをまっすぐ見てくれて、稽古をしている間は私が私としていいろんなことに向き合えた期間だった。

6 公演を終えて①



公演を終えた現在の率直な感想をお聞かせください。

●オーディションに受かると思っていなくて、こんなに素敵なメンバーの中に自分があることが不安だったのに、最終的には周りとは比べることが完全に放棄し楽しんでいて、この公演を通して自分の中の壁を壊せたと思う。他の参加者から、「友達が褒めてたよ」などたくさん嬉しいことを言ってもらい、自己肯定感が上がり自信が付いた。そして何より、かけがえのない友達がたくさんできた。最初はこんなに仲良くなれるなんて思っていなかったしきつと嫌われれるんだらうなと思っていただけ、打ち解けるとみんな個性的でおもしろくて一緒に過ごす時間がかけがえのない時間になった。高校生と創る演劇に参加したことで出会えたの感謝している。

●受験生だったので最初は不安だった。でもどうしても参加したかったので、じっくり自分と相談して参加することに決めた。最初は芝居創りというより人形作りが多かったけど、心どこかでちゃんと上演に持ち込めるのか心配だったが、今まで触れたことのない人形の世界はもうろっ、プロの現場を体験することができ、新たな視野が広がった。また、学校外のコミュニティに参加することで、いろんな人の価値観や意見を知ることができた。私は人見知りで自分から友達を作りに行けるタイプではないが、みんながたくさん話しかけてくれたり、話しかけやすい雰囲気を作ってくれた。高

5 本番について

●あまり緊張せず楽しめた。稽古の時と同じマインドで挑めたのがよかった。

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	11	0	0	0	0
	スタッフ	8	0	0	0	0

- ◆スタッフ仕事内容
 ◎SNS
 ◎稽古記録
 ◎ホワイエ装飾
 ◎小道具製作
 ◎舞台美術製作
 ◎衣裳管理
 ◎舞台装置の操作
 ◎受付スタッフ

5 本番について

●誰かがセリフを忘れても他の誰かが補う形式だったため、ほとんど緊張せず、ただひたすら楽しかった。お客さんからも楽しそうだったと感想をもらえた。演劇をするのは初めてで、他のキャストと比べるときつと劣っている面があったらうなとは思っていただけ、それすらどうでもいいと思えるくらい主体的に楽しめた。私は周りとは違ってしまっタイプなので、こんなふうに感じたことに驚いており、これも成長なのだと思います。

●本番はとにかく楽しかった。今まで高校演劇の本番前はガチガチに緊張していたけど、「せむをかく」の本番前はみんなと踊ったり話したり走り回ったりしてリラックスした状態で本番に臨むことができた。毎公演、想定外のこと起こって驚くことも多かったけど、キャストとスタッフ全員でカバーし合って上演できた。

●のびのびと自由に演じられた。回を重ねるたびに気付くことがあり、自分のイメージをどんどん昇華させることができた。

●芝居というものは今自分が見えているものよりも遥かに深く広くて分からないものなのだと思わせられ、より一層芝居に対して興味

●とても充実した日々だった。最初は他の参加者と仲良くなれるか不安だったが、優しい人ばかりでそんな不安はすぐになくなった。稽古の途中、辛いこともあったけど、このメンバーだから公演ができたと思う。

●長いと思っていたけどあつという間に終わってしまった。初めの頃はたくさん時間があると感じたがすぐに時間が経ってしまった。稽古がなくなつて演出チームやみんなと会えなくなつたり、プラットに通うことがなくなつてしまいうすこく寂しい。3年生のため来年からはもう参加できないけど、良い思い出になったのでやつてよかった。

●芝居というものは今自分が見えているものよりも遥かに深く広くて分からないものなのだと思わせられ、より一層芝居に対して興味

1

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	7	4	0	0	0
	スタッフ	5	1	1	0	0
キャスト	内容	7	4	0	0	0
	スタッフ	4	3	0	0	0

※スタッフ=1名不参加

2

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	4	7	0	0	0
	スタッフ	4	2	1	1	0
キャスト	内容	7	4	0	0	0
	スタッフ	4	4	0	0	0

3

●長いと思っていたけどあつという間に終わってしまった。初めの頃はたくさん時間があると感じたがすぐに時間が経ってしまった。稽古がなくなつて演出チームやみんなと会えなくなつたり、プラットに通うことがなくなつてしまいうすこく寂しい。3年生のため来年からはもう参加できないけど、良い思い出になったのでやつてよかった。

●芝居というものは今自分が見えているものよりも遥かに深く広くて分からないものなのだと思わせられ、より一層芝居に対して興味

●芝居というものは今自分が見えているものよりも遥かに深く広くて分からないものなのだと思わせられ、より一層芝居に対して興味

4

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	7	3	1	0	0
	スタッフ	2	4	2	0	0
キャスト	長さ・回数	8	3	0	0	0
	スタッフ	3	5	0	0	0
キャスト	内容	9	2	0	0	0
	スタッフ	5	3	0	0	0

●前半の2週間が特に楽しかった。まだその時点ではそれがどう芝居と結びついていくのか分からなかったが、毎日取り組むことがただただ楽しく、充実した時間を過ごせた。多くのワークをこなしていく中で、自分自身の課題がいくつも見えてきて、芝居関係なく自分のためになった。高校生と大人の間を繋いでくれる、役者に必要な様々なことを教えてくれたまどかさんの存在が大きくてありがたかった。
 ●辛いときもあったけど、周りに支えられていることを強く感じた。毎日プラットに通いみんなに会えることが幸せだった。
 ●ものすごいセリフ量を覚えなければならぬことや、舞台上で様々なことを同時進行で行わなければならない、本当に大変だった。テスト週間とも重なり、稽古とテストとのバランスを考えることも苦労した。しかしそれ以上に楽しいと思うことの方が多かったように感じる。プレワークショップの時と同じく毎日やることが違つて今日は何をするのだらうとワクワクしながら稽古場に通っていた。良くなかったところはきちんと指摘してもらえ、できるところはしっかり褒めてもらえたのでモチベーションを高い状態でキープできた。



高校生キャスト
今村絆那
荻原花音
片山史博
金子あさひ
田口勇丸
中尾結菜
中野有莉
伴美月
古田 英
山田あおい
若林梨奈

高校生スタッフ
石渡鈴乃
飯領田 楓
大林千紗
坂柳花奈
杉浦愛理
鈴木維英
野本結歌
丸地咲美

脚本——田坂哲郎
演出——川口智子
演出チーム——古賀彰吾
浜野まどか

舞台監督——伊東龍彦
美術プラン——川口智子
音響プラン——島 猛
照明——横原由祐
衣裳——藤谷香子
人形・小道具——古賀彰吾
道中歌作曲——鈴木光介
音響オペ——大浦雛乃
人形指導——眞野トウヨウ
発声指導——新田 恵

宣伝美術——共田慎性(株)エクスラージ
中川裕樹(株)エクスラージ
宣伝写真——荻原ヤスオ

大道具製作——笠井隆行
片桐 健

制作——矢作勝義
長坂奈保美
伴 朱音

制作助手——佐和ぐりこ(オレンチスタ)
票券——上栗陽子、加賀茅捺

協力——非・売れ線系ピーナス
せせらぎ
椿組
オレンチスタ
小柳津礼
内浦有美
安久美神戸神明社
エフエム豊橋
[ティーズ]

主催——豊橋市
(公財)豊橋文化振興財団
企画制作——穂の国とよはし芸術劇場
PLAT

助成／文化庁文化芸術振興費補助金
(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会



東愛知新聞

発行所:東愛知新聞社 〒441-8016 豊橋市新栄町字島崎62 電話0532(32)3111
ホームページ:http://www.higashiaichi.co.jp

2022年(令和4年)
10月31日 月曜日
【仏滅】



地元高校生がプロの演出家らとつくる演劇「せんをかく」が11月5、6日の両日、豊橋市西小田原町の「穂の国とよはし芸術劇場プラット」で公開される。戯曲には東三河の風土や食文化など親しみ深い要素を随所にとり入れた。間近に迫る劇場内の稽古場には、高校生と制作者らの間に張り詰めた空気が漂う。 【加藤広宣】



稽古に励む高校生スタッフで。

東三河色あふれる高校生演劇

来月5、6日に「せんをかく」上演
稽古も大詰め

舞台美術の活性化も人材育成目指し、市と豊橋文化振興財団が2014年に始めた。制作補助を含め公開演劇を高校生10人が制作者として制作を作り上げる。今年度は、福岡市を拠点とする田坂哲郎さんなど脚本、演出を兼ねる川口智子さんが演出を担う。

2人は6月からの市内に滞在し、東三河に伝わる神事や民話など各地を訪ねた。豊川川の「花火祭り」や豊川下流の「三川の渡し」、各地の民話などについて研究者の話を聞いて、道中で見つけたグルメも作中に散りばめられた。

9月、旬からの稽古は連日夜遅くまで続く。稽古を公開した30日は山の稽古を描いたシーンを何

度も繰り返した。川口や村は「豊橋市 各日(金)早(午後)1時、土(午後)5時、日(日)12時、全席自由1人2,000円、25歳以下1,000円、高校生以下500円、問合はチケットセンター(0532・39・3000)へ。」

朝日新聞/2022年11月3日掲載



舞台稽古をする高校生
豊橋市西小田原町

高校生、プロとつくる演劇

劇作家と演出家参加 豊橋で5・6日上演

東三河などの高校生が、プロの劇作家と演出家とつくりあげた演劇が5、6の両日、豊橋市西小田原町の「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」で上演される。劇場が開館した翌年2014年から毎年実施している事業。高校生とプロのスタッフによる継続的な演劇上演は県内ではほかに例がないという。

今年で9作目となる演劇は「高校生と創る演劇『せんをかく』」。福岡在住の脚本家田坂哲郎さんと、東京在住の演出家川口智子さんが豊橋市で取材した内容を元に、田坂さんが脚本を書き下ろした。豊橋の神事や民話などがちりばめられている。

出演者11人はオーディションで選ばれた。出演者の一人の田口勇丸さん(16)＝豊橋市＝は「毎日一歩ずつ成長していく感じが手に取るように実感できて、めちゃくちゃ楽しい」と笑顔で話す。

公演は5日が午後1時と午後6時、6日が午後1時と午後5時から。チケットは前売り、当日とも一般2千円、25歳以下1千円、高校生以下500円。チケットの問い合わせはプラットチケットセンター(0532・39・3090)。

新聞記事

Newspaper article



※掲載の記事・写真は各新聞社の許諾を得て掲載しています。



アンケート

6 公演を終えて②

この企画に参加することで当初あなたはどんなことを望み、何をしたいと思われましたか？ また、それらは実現されましたか？

集計結果

		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	満足度	11	0	0	0	0
	スタッフ	8	0	0	0	0

		参加したい	知人に勧めたい	参加できない	参加しないし勧めない
キャスト	来年	5	5	1	0
	スタッフ	1	7	0	0

		継続した方が長い	どちらともいえない	継続しない方が長い
キャスト	継続	11	0	0
	スタッフ	8	0	0



結果的には想像していた演劇とは違うものだったが、みんなで楽しく作品を創ることは達成できた。

●プロの仕事を間近で見ることが、自分の将来に何か活かせること、気付けることがあるのではないけど、それ以上にたくさんを感じ、気付くことができたのではないかなと思う。

●私は消極的で自分の殻に籠りがちだったので少しでも人との交流を増やせたらと思いついた。最後にはみんなとても仲良くなれた。

●プロの演出家やスタッフ、新たな仲間に出会うことで自分の世界を広げたいと思っていた。演劇の世界は本当に無限大だと改めて感じた。この企画に参加しなければ絶対に見ることができなかった世界を見ることができた。

●高校演劇では出会えない人々たちからの良い刺激が欲しくて参加し、実現できた。みんなの良いところをたくさん知り、自分に取り入れられそうだなと思うことを実行してみることにした。

ができた。おそらく現在の自分と参加する前の自分とは全く違う人間になっていたと思う。

●プロの世界に少しでもいいから触れてみたかった。プロと共に創作できたのは、良い経験になった。

●日常生活ではなかなか関わる機会のない人たちと交流がしたかった。充分すぎる程、実現した。

●新しい何かに触れられたらいいなと思いついて、初めて人形劇について触れることができた。

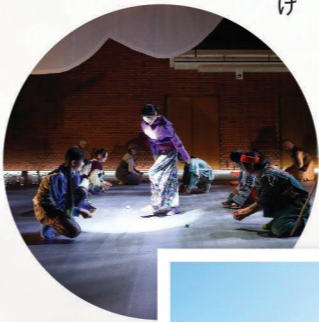
●当初の私は推しの俳優と同じ景色が見てみたいと思っていたのだが、景色というよりも、あの舞台ではこんな気持ちだったのかな、あの時言っていたことに共感できるな、とものすごく深い、感覚的なことを知ることができた。

●演劇が好きで仲間と演劇が創りたかった。実現できた。

●人見知り克服するために挑戦したかった。人見知りは少し良くなり様々なことに挑戦できて良かった。

●舞台装置を作れたことが、今回は小道具の製作が多かった。でもいい経験だった。

●キャストとして参加する気満々だったけど、結局スタッフで参加になって少し落ち込んでいた。でも参加できる喜びの方が大きく、とりあえず頑張って全力でやろう！と励んだ。友達をたくさん作ることができ、プラットのスタッフやプロの演出家たちとも仲良くなれたので参加して良かった。



7 今後、プラットに対する期待・要望等ありましたらご自由に書きください。

●もっとたくさんの人に高校生と創る演劇に参加してほしい。これからもこの企画を続けてほしい。

●高校生と創る演劇以外で、高校生向けの単発演技ワークショップなどを実施してほしい。

●プロの俳優にも出演してほしい。

●演劇に関わっていない高校生が気軽に演劇を観る機会があると嬉しい。

●オンラインでも観劇できるようにしてほしい。